
めたもるふぉ～ぜっ

もぐらさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めたもるふおりぜつ

【NNコード】

N9866M

【作者名】

もぐらさん

【あらすじ】

美都 光は一般的な大学2年生

「ごくごく普通の私立大学に通っている

勿論人より突起した能力があるわけでもない

特別賢いわけでもない

それでも彼は何にでもなれる素質を持っていた

大学といつのは思つたよりも楽しい場所だ。
クラブは好きなときに行つて好きなときに帰る。
授業が億劫ならサボる。
バイトも出来る。
なんて自由なんだ。

私は横になつて羽を伸ばした。

フローリングの床は程よく冷たく気持ちがいい。
日付は6月中旬。

時間は先ほど1時半を少し回つたところ。

高校生のときなら今は5時間目が始まつたところだらうか。
あの時は忙しかつた反面楽しかつた。

勿論今も楽しいが、それよりも楽しく思える。

どちらが楽しかつたにしても今よりも充実した毎日だつた。
「退屈だあ……」

木曜の昼間。

私はTシャツとパンツーTで白室のベットに横たわつている。
誰だ木曜日は休みたいから授業をとらなかつたのは。
それは勿論私。

1年の時に少し単位を取るのを頑張つた反動が来たようだ。
さて、“私”といつのは美都家みとの長男、光のこと。
つまりこの私のことだ。

ついでに言つておくが、美都家は由緒正しき一般家庭。
ご先祖が偉いとか地方の大きな家系だとかではない。
いたつて普通の家庭。

兄が居て、妹が居て、母と父が居る5人家族。
そして私を含めて誰も独り暮らしはしていない。

全員がこの一戸建ての家に住んでいる。

家も特別大きくなく、特徴が無いのが特徴。

兄は2歳違い。

今は就職活動の大詰めだ。

最近は1社2社探つてもらえそうでも油断できないうらしく、最近は数ヶ月前よりもいつも外を飛び回っている。

内定が決まったという話はもう卒業間際の6月の今でも未だ聞かない。

妹は高校生。

本人は女子高に行きたいと望んだらしいが、今のうちに男性になれておいたほうがいいだろうと父の意見を飲んで共学に進んだ。自分の意見をあまりしつかり持たず、結構人に流されやすい。彼氏が居ると言う話は聞かない。

「あ～あ、早く風歌^{ふうか}でも帰つてこないかな」

風歌^{ふうか}というのは妹の名前だ。

人に言つと変に思われているが、結構私と妹の仲はいい方だ。今でも兄妹でゲームをしたりすることがある。

仲が良いのはいいことだと自分でも思う。

ついでに紹介するが、兄の名前は聖夜^{せいや}。

私のことを大学生ニートと呼ぶ。

それに関しては自分でも結構自覚できる。

これほど暇ならバイトでも出来るんじゃないだろうかと。

正直親に遊ぶ金まで出してもらうことに関しては悪気があり、2、3回程だが短期バイトをしたことがある。

しかし高校時代はバイトをしたことがなく、又、この短期バイトも夏休み等の長期の休みに入っていた為、大学生活とバイトの両立の仕方が分からず正直不安でバイトをする気にならない。

そんなこんなでもう大学2年。

「はあ～…」

軽い溜息^{ため息}が出る。

昼間の薄暗い天井は私の行く末を暗示するかのように無表情だ。

「面白くない面してるな」

天井に文句を言つのはそろそろ自分でも暇の限界だと思つ。

そんな矢先に突然日常が変化した。

「それは酷いですよ。これでも結構面白いヤツだなつて言われますのですよ。見た目で人を判断するのは悪いことですよ。あ、でも私は人じやないのですよ？」

「え？……んなああ！！？」

私はベットから跳ね起き、傍にあるもので武器になつそつなものは無いだろうかと探す。

突然左から聞こえる聞きなれない声。

これには驚かないわけが無い。

驚かない人が居るとすれば聞こえていない人かよつぽど心臓に毛が生えているような人だろう。

さて、今傍にあるのはシーツと目覚まし時計。

無意識に私は左手に目覚まし時計を持つて声の主に向けた。

「いやいやいや。驚かせて申し訳ございませんですよ。私はそんなに怖い人じやありませんですよ。私はその……あれですよ。創造主のお使いですよ。所謂神様の使いですよ。神の使いですよ。ほらほら、武器も何も持つてない可愛い女の子ですよ。無抵抗ですよ。無害ですよ」

その声の主は両手を上げて無抵抗の意思を告げてくれる。
よく見ると背は私より20センチ近く小さく、150に行くかどうか。

歳は分からぬが見た目で言えば高校1年かもっと若く見つなら
中学の2・3年ってところ。

話し方がかなり奇抜で、個人的にめんべくさい。

と、そこまで彼女を下から上に眺めたところで私の左手の目覚まし時計は下ろされることはない。

逆にそこまで言われたら警戒しないと言われてこるようなもんだ。

私はベットの上で小刻みに震えながら彼女に声を張り上げた。

「か、仮にあなたが私の知らない従兄弟だとしても非常識なヤツだ
しこの家に望む額のお金は無い！！ 私のサイフには3000円弱
しか入つてない！！ どうだ参ったか！！」

その後しばしの沈黙。

どうやら私の頭の中で色々な思考が洗濯機にかけられているよう
だ。

「あ～、お金じゃないのですよ。創造主が欲しいのはお金じゃない
のですよ。あなたなのですよ」

そしてさらに沈黙。

洗濯機が頭から消え、真っ白な空間が広がった。

「え？」

考える余裕が私から消えた。

そしてこの日から私の日常の中に異常が入ることになる。
これぞまさに“日《異》常”。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9866m/>

めたもるふぉ～ぜつ

2010年10月8日11時49分発行